

差別された経験が同性愛者に対する態度に与える影響

○村里天音¹・清末有紀²・森永康子²

(¹ 広島大学教育学部, ² 広島大学大学院人間社会科学研究科)

目的

同性愛者に対する態度を扱った従来の研究では、男性よりも女性の方が同性愛者に対して好意的であることが報告されている(e.g., 和田, 2008)。これは、女性がマイノリティとしての苦痛を感じた経験が多いため、同じマイノリティである同性愛者に共感的な態度を示すようになるためではないかと考えられる (マイノリティ共感; 葛西, 2019)。そこで、本研究では同性愛者に対する態度における性差は被差別経験の頻度が異なるためであるという仮説を検討する。また、マイノリティに対する態度に影響を与える要因に内発的偏見抑制動機 (以下, IMS; Devine et al., 2002) がある。本研究では IMS の効果についても検討する。

方法

参加者 クラウドソーシングで募集した 20 歳から 39 歳の異性愛者である男女 467 名 (女性 227 名), 平均年齢 32.3 歳, $SD = 4.68$ 。

手続きと質問項目 調査はオンライン上で行った。研究参加への同意を得たのち、同性愛者に対する態度 (6 項目, 5 件法, 項目例「男性同士の性行為はどうしようもなく間違っている (逆転)」, $\alpha = .904$), 被差別経験の頻度 (8 項目, 4 件法, 項目例「男性 (女性) であるせいで差別されたことがある」, $\alpha = .918$), IMS (5 項目, 5 件法, 項目例「偏見に基づいてふるまわないようにするのが私にとっては重要である」, $\alpha = .784$) を尋ねた。なお、同性愛者に対する態度は、男性同性愛 (以下, G 態度; $\alpha = .815$), 女性同性愛 (以下, L 態度; $\alpha = .812$) に分けて尋ねた。

結果

各測度の記述統計を表 1 に示した。同性愛者に対する態度には有意な性差が見られ、女性は男性よりも同性愛者に対して好意的な態度を持っていた。しかし、被差別経験については有意な性差が見られなかった。仮説を検討するために、媒介分析を行ったが、有意な媒介効果は得られなかった (図 1)。

IMS の効果を検討するために、参加者の性別ごとに、被差別経験の頻度, IMS, その交互作用を

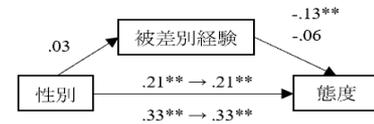
説明変数、同性愛者に対する態度を目的変数として重回帰分析を行った (表 2)。その結果、男女ともに IMS が高いほど同性愛者に対して好意的であった。交互作用は、男女の L 態度, 女性の G 態度に見られた。下位検定の結果、被差別経験が多く、IMS が低い人は否定的な態度を示した (図 2 は女性の G 態度)。

表1 各変数の記述統計

	男性		女性		t 値
	M	SD	M	SD	
L態度	3.33	0.93	3.73	0.94	4.60 ***
G態度	3.05	1.01	3.74	0.95	7.58 ***
被差別経験	1.81	0.76	1.85	0.70	-0.70

得点が高いほど好意的な態度を示す, *** $p < .001$

図1 媒介分析の結果



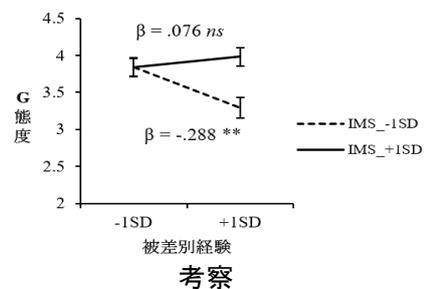
上部はL態度, 下部はG態度

表2 重回帰分析の結果

	男性		女性	
	L態度	G態度	L態度	G態度
被差別経験	-.104 +	.007	-.092	-.106
IMS	.328 **	.291 **	.181 **	.179 **
交互作用	.139 *	.039	.110 +	.164 *
R ²	.144 **	.083 **	.047 *	.061 **

数字は標準化係数

図2 被差別経験とIMSの交互作用 (女性のG態度)



同性愛者に対する態度の性差と被差別経験の頻度の関係は明白にならなかった。また、被差別経験が多くても、IMS が低ければ、同性愛者に対する態度が否定的であり、同性愛者に対する態度には被差別経験だけでなく IMS も重要であることが示唆された。 (科研費 21K02978)